老狐首を吊って火事を防ぐ

『作兵衛どん、こんなところになにをしているんだ。天とうさまが、一丈もたかくあがったよ。』と、となりの家の新どんに声をかけられ、百姓作兵衛は目をさましました。作兵衛にしてみれば、近所のわかし温泉で一ぱいひっかけいい気持でねていたわけでありました。ふとんと思ったのは乾し草をかさねたものであり、湯船と思ったのは、木の香も新しいきのう据えたばかりの肥溜でありました。狐にばかにされたことは誰にでもわかることでした。

しかし、どう考えてみても悪意にみちた狐のいたずらではなく、そこに何か一ぱい好意といったものが感じられました。さてはあの狐のしわざかと思い、作兵衛次のように申しました。『今から五年前のこと、猟師に追われた傷を負った狐が一匹、うちの木ごやに駈けこんできたことがある。わしはかわいそうに思い、薬をつけ繃帯をまいて、夜中に放してやったことがある。多分、その狐のしわざに相違ないと思われるのだ。』

そして作兵衛は一匹の狐が枕元にきて『ここの屋敷に大火事がおこるが、この身を鎮守さまにささげ、その火難を防ぐことを祈願するつもりだ。』という聞きすてにできない重大なことを申しました。そこで、このふたりは鎮守さまのところにまいりました。もしやと思ったことが、それは正夢でありました。老狐が社前